第１８回日本水大賞　応募用紙

様式-1

（整理番号：　　）

活動の名称	チイキキョウドウデミズノミヤコ・ミシマノミズトミドリノネットワークヲソウゾウ 地域協働で水の都・三島の水と緑のネットワークを創造		
記入年月日	活　動　主　体（下記より１つ選択）		分　野（複数選択可）
平成27年10月31日	学校　企業　[団体]　個人　行政		水防災・[水資源]・[水環境]・[水文化]・復興
活動主体の概要			
活動主体の名称（個人応募の場合は個人名）	トクテイヒエイリカツドウホウジン　グラウンドワークミシマ 特定非営利活動法人　グラウンドワーク三島		
代表者名（団体の場合）		設立年月日	平成 4年 9月 （法人格取得　平成 11年 10月 14日）
住　所			
電　話		FAX	
E-mail			
主な活動地	(1)静岡県三島市源兵衛川、(2)静岡県三島市・沼津市松毛川、(3)静岡県三島市境川		
組織の概要（個人の場合は履歴を記入）	英国発祥の市民・ＮＰＯ・行政・企業との地域協働による環境改善活動であるグラウンドワークの手法を日本で最初に導入し、「水の都・三島」の水辺自然環境の再生と原自然の生態系の復活を図るとともに、市民力・地域力を原動力とした地域コミュニティを育成する。		

応募担当者　（代表者と違う場合記入して下さい）

氏　名		所属： 役職：	
住　所	〒　　同上		
電　話	同上	FAX	同上
E-mail		URL	

応募活動の概要：

市民・ＮＰＯ・企業・行政との地域協働による、23年間にわたるグラウンドワーク活動を通して、環境が悪化した「水の都・三島」の原自然を再生すべく、60箇所もの環境改善活動に取組んできた。

特に、狩野川の旧河川敷の松毛川や富士山水系の湧水池が点在する境川、市街地を流れる源兵衛川の3つの河川を中心に、希少種の生息環境の再生や潜在自然植生の植樹等を行い、各川の固有の環境特性を高め、川相互の生態系の循環・回廊性を拡大する「水と緑のネットワーク」を形成したことにより、消滅した三島梅花藻や絶滅危惧種ホトケドジョウの復活を成し遂げ、再生した川には子どもたちが、川遊びに興じホタルが乱舞する親水性の高い川を蘇らせた。

応募活動のアピールポイント：

- 地域協働による23年以上の実践的・持続的な環境改善活動を通して「水の都・三島」の原自然を劇的に再生させた。
- 現在、市内を流れる川の自然特性を活かした水と緑のネットワークの形成・強化に取組んでいる。

これまでの受賞歴：

※日本水大賞への既往応募歴（第　　）受賞がある場合は　第（　　）回（　　）賞

「日本水大賞」をどこで知りましたか？（数字に〇印を付けて下さい）

１．新聞広告　　２．官庁内ポスター　　３．協会ホームページ　　④．協会からの誘い

５．国の機関からの誘い　　６．県・市町村からの誘い　　７．教育関係機関

８．その他（　　）

様式-2

（整理番号：　　）

活動の概要

目的：静岡県三島市は古くより「水の都」と呼ばれ、市内各所で富士山の湧水が噴出する豊かな水辺自然環境を有していた。しかし、昭和30年代半ば、上流地域での産業活動の進展や生活環境の変化によって地下水が減少し、特に、市内最大の湧水河川である源兵衛川は、ゴミが捨てられ生活雑排水が流入するドブ川と化してしまった。

そこで、「水の都・三島」の原風景・原体験を再生・復活すべく、平成4年に「グラウンドワーク三島」を設立し、英国発祥の市民・ＮＰＯ・行政・企業のパートナーシップによる環境改善を目指すグラウンドワークの手法を日本で最初に導入し、市民内発型の市民活動を開始した。

当会が市民・ＮＰＯ・行政・企業の「調整・仲介役」となり、実践的な地域環境改善活動に取組んだ結果、源兵衛川には豊かな水辺自然環境が蘇った。その後、23年間以上にわたり、自然環境保全活動や環境教育活動、環境コミュニティ・ビジネス等の多様な活動を実施し、相互にメリットを甘受できる共存共栄の新たな「地域協働」の仕組みと、具体的な現場モデル・実践地を60箇所以上も創りあげてきた。

現在、原点となる源兵衛川の活動をさらに発展させて、三島市内の松毛川や境川の各河川でも環境改善活動に着手してきている。これらの活動によって形成・増幅された自然環境を、「水と緑のネットワーク」として、有機的に連結させることにより、生物多様性の強化と生きものたちの生息域を向上させることを目指している。

内容：

(1)源兵衛川「ふるさとの川づくり」…源兵衛川は、中心市街地に位置する全長1.5kmの農業用水路・都市河川である。昭和30年代半ばから深刻な環境悪化が進行したが、平成2年以降、市民による年間50回以上の地道な環境改善活動と住民参加の計画づくり、補助金の導入等の総合的な取組みにより、中心市街地に豊かな水辺自然空間が復活して、多くの市民の憩いの場となっている。当会では、環境改善活動と並行して、新たな地域協働による生物多様性を保全する活動に着手してきている。環境モニタリング調査、外来種の除去と在来種の導入による希少種の生息環境の再生活動等を継続・実施し、ホトケドジョウ（県レッドリスト絶滅危惧ⅠA類／県東部）やゲンジボタル、カワセミが生息し、一度は源兵衛川から消滅したミシマバイカモ（環境省絶滅危惧Ⅱ類）の群落が復活・自生する、多種多様な生態系が生息する自然度の高い川が創出されている。

近年では、工事で中流部に生コンクリートが流され、ホトケドジョウ等の水生生物が大量に死滅し、最下流部・中郷温水池の水面が外来種ホテイアオイで覆われる等の環境被害が発生したが、生態系専門家との協働による現地調査や、市民との人海戦術による迅速な除去作業等に取組み、被害を最小限に食い止めた。

また、ふるさとの川づくりを担う人材育成にも力を入れている。平成16年度からの「リバーインストラクター養成塾」では市民延べ100人を育成した。平成21年度からは、子ども対象の「環境出前講座」を本格的に展開しており、平成26年度は、三島市教育委員会や企業から高い評価を受け、水辺再生や生物多様性を学ぶ現場体験型のプログラムを延べ39回開講し、受講者計2,211人を集めるまでに発展している。

現在、源兵衛川の環境改善活動は年間15回以上にも及び、経費的には300万円を要し、環境教育活動を含めて、参加者は年間延べ3,000人を数え、視察者も1,500人が訪れている。

(2)松毛川「千年の森づくり」…松毛川は、源兵衛川の最下流域に位置する、狩野川流域に唯一残された6haの止水域である。両岸には、狩野川の原風景であるエノキ等による1,300本の河畔林が広がり、樹齢100年以上の巨木が130本以上も残存する貴重な旧河川敷である。しかし、土地所有者の高齢化と農地の放棄により、河畔林周辺は繁茂した竹林に覆われ、風雨や老齢化による倒木も発生して、大切なふるさとの森が消滅の危機に瀕していた。

そこで当会では、松毛川を「千年の森」と位置付け、平成15年から地域協働による環境改善活動を実施してきた。これまでに河畔1.5kmにも及ぶ竹林伐採や潜在自然植生の苗木4,500本以上の植樹、外来種ホテイアオイの駆逐、2tトラック数十台分以上のゴミの除去、松毛三日月会等地元愛護会の結成、自然観察会の開催、大学生の現場体験や企業のＣＳＲ活動の場としての活用、国の治水対策等補助事業導入の提案を進めてきた。参加者は年間延べ500人に及び、経費は500万円程度を助成金や補助金を活用して投入している。

現在、当会の活動が広く広報され、多くの市民が松毛川の存在と川と森の貴重性を認識し始めている。また、3年後に国の治水事業（約5億円）の実施が予定され、当会の「千年の森づくりトラスト」運動での河畔林の買収、さらに三島市による周辺部の買収と親水公園化事業の計画策定等も現実化し始めている。10年以上にわたる、ノコギリとゴミ袋を持った、当会の地道な環境改善活動が、「千年の森づくり」へと力強い道筋を進み始めている。

(3)境川「富士山・境川大湧水公園構想」…境川は、三島市と駿東郡清水町の境を流れる一級河川である。中流部の左岸に位置する「境川・清住緑地」は、市街地の中にありながら、豊かな森、富士山水系の湧水池、水田が点在する約8,500㎡のビオトープ公園であり、平成7年から平成12年の間、当会が環境整備計画の策定と関係機関の調整役を担ってきた。完成後は、地域住民による「境川・清住緑地愛護会」が維持管理を担い、原風景である低湿地の自然が復元・保全されて多様な動植物が生息し、水田での稲作体験等、三島市立西小学校の環境教育の場としても活用されている。平成27年、南隣の湧水を水源とする複数のコンクリート池の養魚場跡地約3,000㎡を、三島市が買収し、湧水公園の範囲を拡大することになった。これを受け、当会では、両エリアと境川右岸に位置する農業用ため池「丸池」を含めた全体約3.0haを、全国に誇る「富士山・境川大湧水公園」とすべく、環境基礎調査やワークショップ、ワンデイチャレンジ等の「エコロジーアップ（生態系の強化）」、子どもから大人までの新たな地域人材の発掘と地域協働による持続的な維持管理体制の構築を進めてきた。

毎年、愛護会を中心として300人以上の地域住民が主体的な管理に関わり、子どもたちも年間11回・延べ800人が「田んぼの楽校」を体験している。経費的には三島市からの愛護会への委託費83万円と当会の50万円程度が投入されている。これら20年以上にわたる湧水池の環境改善活動が切掛けとなり、現在では、三島駅から柿田川までを巡る水と緑の散策路として観光客から好評を得て、年間5万人近い来訪者が来る観光スポットになっている。

今後は、新たな湧水池との一体的・広域的な川と緑の整備計画の策定を進め、富士山の湧水の美しさと川の多様な魅力を体験・実感できる、「大湧水公園構想」の実現に先導役として取組んでいく。

活動期間	自　平成 4年 9月～　至　平成 27年 10月（通算 23年 1月・継続中）

上記の期間以前から一部の活動を実施していた場合はその期間と内容を下に記入してください。

当会は、平成3年の「三島ゆうすい会」設立の主要なメンバーであり、源兵衛川の初期段階での地元調整活動を担ってきた。しかし、単体組織の活動では、資金的、専門的、人材的、社会的信用度的に限界があり、湧水網都市・三島の現状を踏まえ、源兵衛川の再生を成功モデルに位置付けながら、松毛川や境川等湧水池を含めた、多様な川との生態系コリドー・水と緑のネットワーク形成を目指して、より連携軸の強い、市民ネットワーク型の組織づくりを構築すべく、「グラウンドワーク三島」を設立した。現在、23年が経過して、年間620万人の観光客が訪れる、空き店舗ゼロの街が創出され、当会が、その先導役・調整役を担ってきた。

様式-3

（整理番号：　　）

活動の必要性・緊急性：

- 源兵衛川では、水辺の環境改善から20年以上が経過し、世代交代が進む中で、水辺再生の経緯を実体験していない子どもや流域住民が増加している。今後も源兵衛川の生物多様性を持続的に守り育てるためには、生態系の貴重性や環境再生の取組みを理解し、自ら生物多様性保全活動を担う次世代の人材育成と、地域総参加による維持管理体制の再構築が急務となっている。
- 松毛川では、ヘドロやゴミの堆積による治水機能の低下や、竹害による貴重な巨木の倒木等の環境悪化が深刻化しており、市民・ＮＰＯ・行政・企業との新たな地域協働による、「千年の森づくり」に向けた実効性の高い取組みが急務となっている。
- 境川では、完成から15年経過した境川・清住緑地の樹林遷移等による生物多様性の低下や愛護会会員の高齢化が進行している。隣接の養魚場跡地と農業用ため池の豊富な湧水を生かした整備構想の策定と環境整備、新たな地域人材の発掘と持続的な維持管理体制の構築が必要とされている。

活動の効果・社会への波及効果：

- 松毛川・境川・源兵衛川での環境改善活動によって、希少種をはじめとした多様な動植物が生息する豊かな環境が創出され、生物多様性が向上し、ふるさとの原風景・原体験が復活した。特に源兵衛川は、「水の都・三島」を代表する観光スポットとしての役割・牽引力を発揮しており、来街者や街歩きの観光客の急増や、それに伴う中心商店街の空き店舗の解消等、「環境再生」が「地域再生・観光振興」に拡大・発展している。また、子どもや市民にとっての生きた環境教育の場として活用することで、生態系に関する的確な知識が浸透し、次代のふるさとの川づくりを担う「人材育成」の場として教育的波及効果を担っている。
- 三島市の中心市街地（源兵衛川）と外縁部（松毛川・境川）に豊かな環境が創出されることで、それぞれが有機的に結びついた「水と緑のネットワーク」が形成され、点が線で結ばれ、面として拡大・広域化して、より活発で回遊性の高い人の流れや相乗的な生物多様性保全効果を生み出している。

活動を実施する上での留意点、工夫された点、苦労された点：

事業の推進にあたっては、自然観察会やワークショップ等を通して、関係者の合意形成に多くの時間をかけ、地域住民が、主体的に身近な環境を守り、育てていける、地域協働の体制になるように工夫・調整している。

現在、当会は、20の市民団体（構成約6,000人）が参画し、150人以上の個人会員から構成され、企業200社、三島市や静岡県、地域ボランティア（延べ40,000人）等が活動に参加している。

これらの活動は、「右手にスコップ・左手に缶ビール」の明快で楽しいスローガンのもと、地域の多くの人々の実践的な参加により進められている。身近な生活環境の中で発生した地域課題に対して傍観者ではなく、積極的、具体的な形で取組み、小さな成果を残すことにより、市民自身に誇りを取り戻し、街への愛着の気持ちを醸成する「自立と自発への心の変革運動」といえる。「議論よりもアクション」「走りながら考える」が行動指針・規範であり、課題解決に市民が主体的・自主的に取組む、現場主義の「大人の学校」づくりに留意している。

活動の今後の計画：

子どもや地域住民、市民と共に、「水の都・三島」の原風景であるふるさとの森、水辺、富士山からの湧水池の実践的な環境改善・環境再生・生態系保全活動を継続・実施して、生態系コリドーを創出すると共に、次世代の人材育成を踏まえた、地域の子どもたちへの実践的な環境教育・体験学習の場としての活用を展開していく。

具体的には、源兵衛川、松毛川、境川に加え、御殿川や四ノ宮川、桜川、「三島梅花藻の里」、大場地区里山エリアといったハビタットとしての潜在力の高い河川・湧水池の環境改善活動を進めて、「水と緑のネットワーク」をさらに強化・発展・現実化させ、その有効性を実証していく。

毎年、300人近い大学生のインターンシップを受け入れていることから、来年度以降に「地域再生実践大学」を開校して、多様な現場モデル・成功モデルのマネジメントやビジネスのノウハウを学術的・専門的・生態学的・現場学的・体系的・包括的に学べる場づくりを進める。

また、国内外からの視察者も毎年1,500人以上と多いことから、具体的な課題を抱えた川や森の再生手法、行政や企業へのアプローチ、資金調達のノウハウ、合意形成のポイント、ＮＰＯビジネスへの取組み、英国のグラウンドワーク等を学べる「活動マニュアル本」（英語版含む）を作成するとともに、英国研修ツアー等を企画して、地域創生を牽引できる先進的な資質を持ったまちづくりのトップリーダーの育成に取組んでいく。

川や森の再生、生物多様性の強化等の環境再生が街の経済的な振興に連動・拡大していく、当会の成功モデルを例示することによって、未利用・未開発のために埋没している地域資源の大切さと付加価値の高さ、発展の可能性への再評価を高め、ふるさとでの元気人の輩出を後押しする、革新的な社会実験に持続的に取組んでいく。

応募推薦者

氏　名		推薦の言葉　：
所　属		
電　話		
氏　名		推薦の言葉　：
所　属		
電　話		

静岡新聞

平成２７年(2015年)１月１８日（日曜日）

ホタル生息環境改善へ

GW三島と学生協力 源兵衛川で美化活動

三島市のNPO法人グラウンドワーク（GW）三島は17日、同市で「源兵衛川水辺再生ワンデイチャレンジ」を実施した。GW三島が美化と保全に取り組む源兵衛川で、都留文科大（山梨県）の学生らがホタルなどの生息環境を広げようと水草の伐採に臨んだ。

学生とGW三島の関係者約20人は、市消防庁舎近くの下流約250㍍の水域でアシなどを刈り、熊手で川底のヘドロをかき出した。

参加者の同大3年、島田裕之さんは「昨年から美化活動に参加している中、毎回着実にきれいになっている。ごみも減り、地域の皆さんの意識も高まっている」と言葉に実感を込めた。

美化活動に取り組む学生
＝三島市の源兵衛川下流

かつては生活排水などに汚染された源兵衛川。GW三島などが再生に尽力し、環境省の絶滅危惧種に指定されるホトケドジョウなど100種以上もの生物が生息する清流が取り戻された。今回の活動で風通しや日当たりを向上させ、生物の産卵環境のさらなる向上を目指す。卵が産み落とされる在来種の水草が生えやすいようにと、水際の斜面の整備も計画しているという。

静岡新聞

平成２７年(2015年)３月１７日（火曜日）

松毛川に植樹200本

ＧＷ三島

ＮＰＯ法人グラウンドワーク（ＧＷ）三島は15日、整備を進める三島市の松毛川で植樹活動を実施した。沼津市との市境を流れる河川の右岸に約２００本を植えた。

ＧＷ三島は２００７年から全長約１・４キロの両岸の再生を進め、これまでに約５千本を植樹した。この日は昨年に放置竹林を伐採した約３００平方メートルにタブノキやエノキなどを植え、豊岡武士市長や渡辺豊博専務理事の下で学ぶ都留文科大生ら約20人が汗を流した。

07年に植えた苗木は大きい物で7メートルほどにまで成長した。ＧＷ三島は樹齢１００年を超えるとされる周辺の巨木約１３０本の管理にも取り組む。参加した同大3年の山下瑠己さんは「10回ほど参加しているけれど、もともとの竹林も見ているのできれいになってうれしい。何年後かには木が生い茂り、子どもたちの集まる場所になってほしい」と充実感をにじませた。

植樹を進める豊岡市長（右から2人目）と学生ら＝三島市内

静岡新聞

平成２４年(2012年)８月１３日（月曜日）

境川の水辺整備考える

ＧＷ三島が市民ワークショップ

養魚場跡地周辺 環境変化を懸念

境川流域の地図を広げて話し合う参加者＝三島市緑町の西地区コミュニティ防災センター

ＮＰＯ法人グラウンドワーク（ＧＷ）三島は12日、三島市と清水町の市町境を流れる1級河川「境川」周辺の水辺環境整備を考える市民ワークショップを、同市緑町の西地区コミュニティ防災センターで開いた。両市町流域にまたがる養魚場跡地とその周辺エリア約4～5㌶の在り方について、地元住民や学生ら約20人が話し合った。

養魚場跡地は現在、民間企業が買収して水辺や湿地帯の埋め立て工事を進めている。ＧＷ三島の渡辺豊博専務理事は「周辺の自然度が激減して、環境改変が強く懸念される」と課題を提起した。ワークショップでは養魚場跡地北側の湧水ビオトープ公園「境川・清住緑地」、西側隣地の農業用ため池「丸池」周辺、南側の田畑地帯を含めたエリア全体について検討した。

参加者からは「一帯は魚類や鳥類の貴重な生息地」「立派なムクノキを後世に残したい」と環境保全を求める意見や、「富士山を眺望できるのでウオーキングルートになりうる」などの提案が出された。

ＧＷ三島は地元自治会やＰＴＡなどに呼び掛けて合意形成を図り、柿田川に隣接する「大湧水公園」として整備構想をまとめるという。今秋にも県や市町、企業に具体的な提案をしていく。